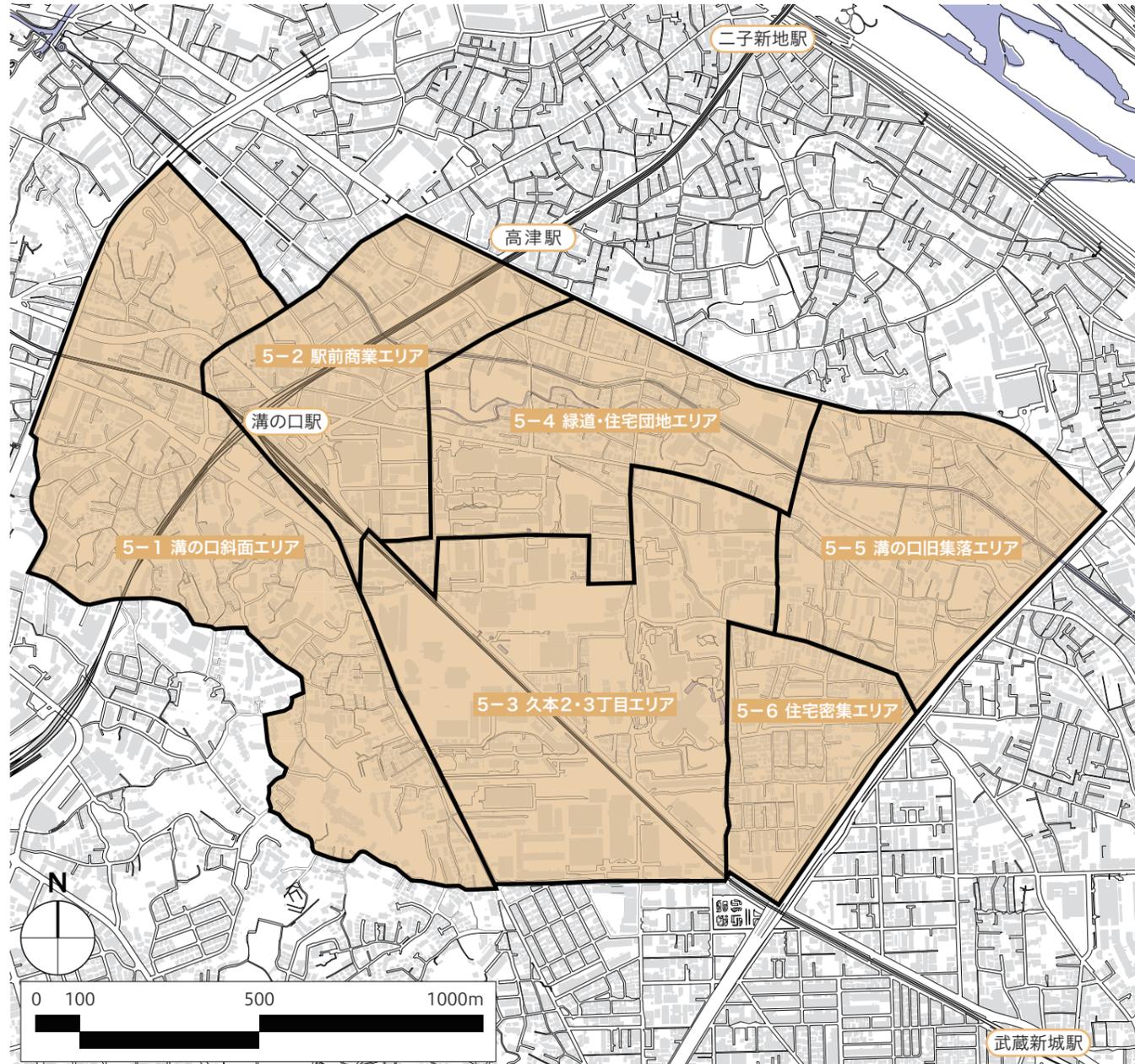
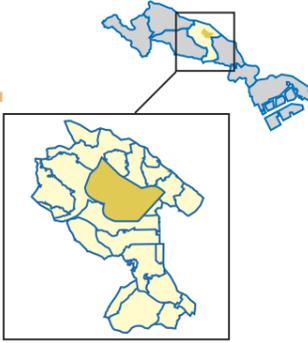


5 溝の口地区

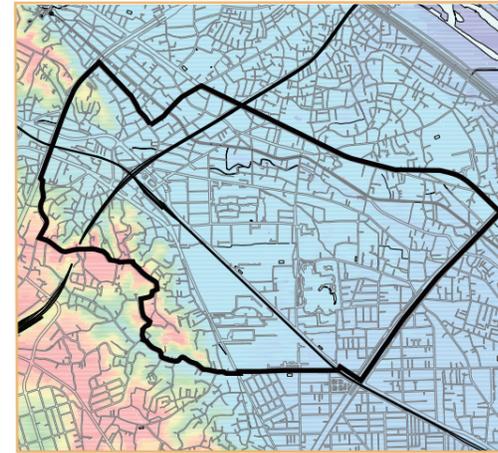
溝の口は神奈川県川崎市高津区の北部に位置しています。溝の口という地名は多摩川の丘陵に流れる多くの小さな川が低地に流れ出る様子が「溝の出口」に見えることが由来とされています。溝の口地区は溝口1~3丁目、久本1~3丁目、坂戸1~3丁目、北見方1丁目、二子5,6丁目から構成されています。駅周辺の溝口地区は商業エリア、久本地区は工場や学校など大規模敷地のエリア、坂戸、北見方地区は住宅や緑が多いエリアとなっており、多くの特徴を併せ持つのが溝の口地区です。また、神社や旧道が多く存在し、歴史の形がエリア全体に残されているのも特徴の一つです。



- 5-1 溝の口斜面エリア**
斜面緑地を守り、共存した住みやすい景観へ
- 5-2 駅前商業エリア**
多様な都市機能が混在し、にぎわいのある景観の形成
- 5-3 久本2・3丁目エリア**
大規模敷地が周辺環境と調和したみどり豊かな景観を作る
- 5-4 緑道・住宅団地エリア**
連続する緑と水辺空間をつなぐ、心地よい住環境を目指したまちへ
- 5-5 溝の口旧集落エリア**
旧集落の空間要素を保全しつつ、歩きやすい住景観へ
- 5-6 住宅密集エリア**
緑と暮らしが共存する、統一感のある住宅景観の形成へ

地区の概要

地形の境界に住商が共存する景観



溝の口周辺の標高

平坦地と丘陵地の境界

溝の口の地形は多摩川や二ヶ領用水の流れる平坦地と、多摩丘陵の東端部にあたる多摩川崖線で形成され、豊かな水辺空間と起伏ある地形で構成されています。平坦地は整備された景観が広がる一方で、丘陵地は対照的に古くからの景観を色濃く残しています。

商業と住宅が共存

溝の口駅周辺は飲食店や商業施設が集積していますが、駅から離れると居住地が広がっています。旧道を活かした住宅地が広がるエリアのほか、集合住宅が多く見られるエリアなど、エリアにより様々な顔をもった住宅街を見ることができます。

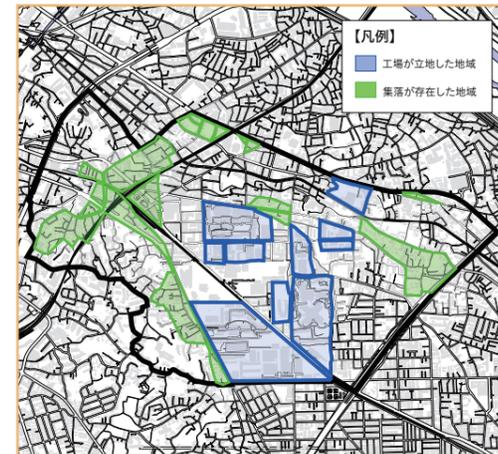


【5-1 溝の口斜面エリア】
丘陵地に残る古くからの景観



【5-4 緑道・住宅団地エリア】
商業地と住宅地が共存するエリア

歴史の面影を残す景観



溝の口周辺の街路形成

工場の街から複合都市へ

昭和以降、南武線沿線を中心に多くの工場や研究所が立地し、溝の口周辺は主要企業の通勤圏として発展しました。戦後、多くの工場の閉鎖により広大な跡地が残され、現在は大規模集合住宅や研究施設などに転用されて工業地域と住居地域が混在する景観が特徴的なエリアとなっています。

闇市から商店街へ

終戦直後の昭和20年末頃、食料難を背景に100店舗規模の露店群として自然発生的に誕生しました。やがて戦後復興を支える闇市と転じ、これが溝の口駅西口商店街の前身となりました。

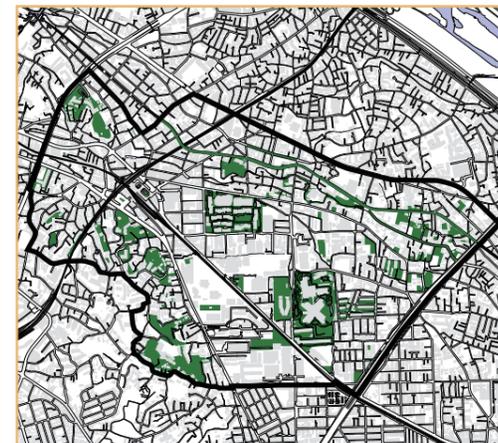


【5-3 久本2・3丁目エリア】
工場跡地に整備された大規模集合住宅



【5-2 駅前商業エリア】
闇市から発展した溝の口駅西口商店街

水とみどりによる豊かな景観



緑被現況分布図

住宅と私有地のみどり

溝の口の住宅地は敷地が狭く建物が密集しているため、公園などの公共の緑が限られています。一方で、住宅の庭先や塀沿いに植えられた私有地の小さなみどりが景観をやわらげており、密集市街地において大きな役割を果たしています。

水とみどりの歴史ある軸

溝の口では、二ヶ領用水や大山街道といった歴史的な軸を中心に、みどり豊かな景観が形成されています。道路や用水に沿った緑化は、水源とみどりによってまちに潤いをもたらし、歴史的な景観の保存に寄与しています。



【5-5 溝の口旧集落エリア】
住宅街の街路空間に整備されたみどり

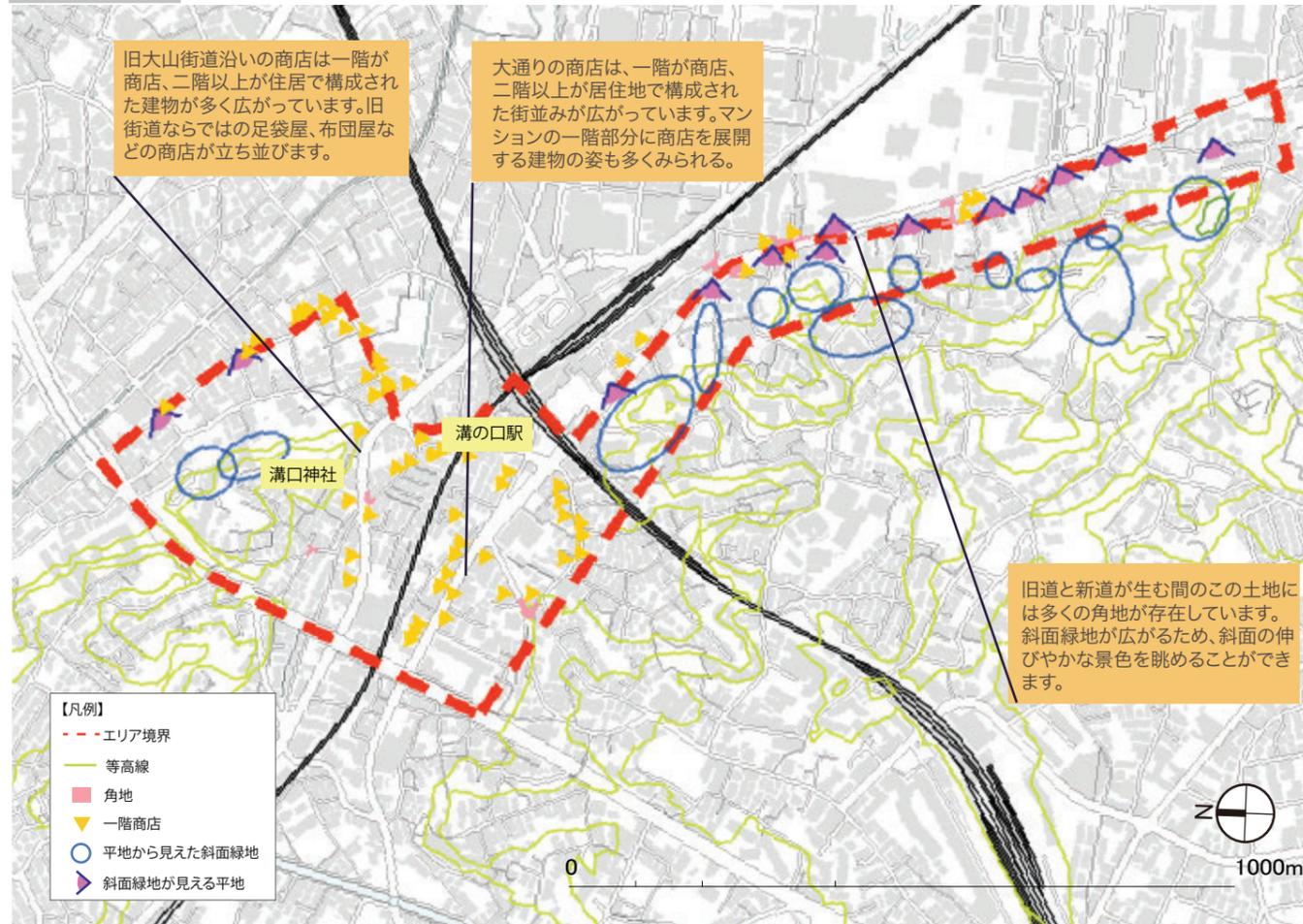


【5-4 緑道・住宅団地エリア】
二ヶ領用水沿いの樹木による緑化

5-1 溝の口斜面エリア

南武線の西側地域は、地形的に西へ向かって緩やかに標高が上がっていく丘陵地帯であり、斜面に沿って住宅地が広がっています。地域内には細く入り組んだ道が多く、古くからの住宅地ならではの複雑な街路構成が見られる点が特徴的です。また、南武線の南側にはかつての生活道路であった曲線的な旧道が今も残っており、それと対照的に、区画整理により整備された直線的な道路も存在します。これにより、過去の街路の名残と現代的な都市構造の違いを比較しながら観察することができ、地域の歴史や都市形成過程を読み取ることができます。

景観特性



1. 平地から見える斜面緑地



このエリアでは、平地から西側の高台を望む位置関係にあるため、街路の一部から斜面上の住宅や緑地を見上げる景色が広がっています。特に、崖のような急な高低差がある箇所では、立体的な都市景観が形成されていて、日常の中に変化のある視界やランドスケープの豊かさを感じられます。

2. 旧道と新道の角地



駅周辺では新道の整備によって旧道との間に隙間が生じ、様々な不整形の狭小角地が点在しています。これらの敷地は間口が非常に狭いものや奥行きが偏ったものが多く、一般的な宅地とは異なる特徴を持ちます。敷地形状に合わせた建て方が周辺エリアの独特な街並みと景観を創り出しています。

3. 店舗併用住宅の街並み



溝の口駅北側のエリアでは、1階に飲食店や物販店舗が入り、2階以上が住居となった店舗併用住宅が多く、街道沿いに立ち並んでいます。これらの建物の前には比較的広めの歩道が整備されており通行しやすく、店先のディスプレイなどがまちに開放感と親しみやすさを演出しています。

景観形成の目標

斜面緑地を守り、共存した住みやすい景観へ

本エリアは旧道と新道が交差し、昔ながらの街路と新しいまちづくりが共存するエリアである。そこで沿道住宅のプライバシーを確保し、防犯面の向上も図りながら、連続した街並みを目指す。商業と居住が程よく沿道に開放され、通りに解放感と安心感をもたらしながらも、住宅のプライバシーを守る景観形成を目指す。

景観形成の方針

1. 平地から見える斜面緑地を保全する

景観形成の考え方

平地からも緑を味わうことのできる斜面緑地を守ることで、立体感のある街の自然景観の保全を目指す。

具体的な方策

- 斜面に面した住居の壁面に生垣、木、花などの緑を取り入れ、斜面緑地の景観を保護する。
- 自然と建物の調和を図るため、建物の色のトーンを抑える。
- 午前中に日が当たる地形を活かし、斜面における園芸を推進する。



傾斜に合わせて生垣や園芸の推進

斜面緑地の保全

2. 角地を活かした生活空間をつくる

景観形成の考え方

多方向からの視線や通行を受け止める開放感を活かし、街の中でアイストップとなる角地が周囲と調和しながら広がり賑わいを生み出す空間づくりを目指す。

具体的な方策

- 多方向からの視線や通行人の動きに考慮した開放的な建物配置を行う。
- アイストップとなる角地には特徴的なアイストップデザインを採用し視覚的なアクセントとをつくる。
- 周囲の街並みと調和する素材や色彩を採用する。



アイストップとなる角に休憩用ベンチを設置

角地を活かした空間形成

3. 商業と居住が調和した開放的で安心できる景観

景観形成の考え方

商業と居住が程よく沿道に開放され、通りに解放感と安心感をもたらしながらも、住宅のプライバシーを守る景観形成を目指す。

具体的な方策

- 住宅のベランダ部分に緑のカーテンを配置する。
- 近隣の店舗併用住宅にも緑のカーテン設置を促進し、沿道に統一感を広げる。
- 地面に埋め込み型の照明を設け、夜道に安心感をもたらす、沿道に連続性を与える。



プライバシーの確保と環境への配慮

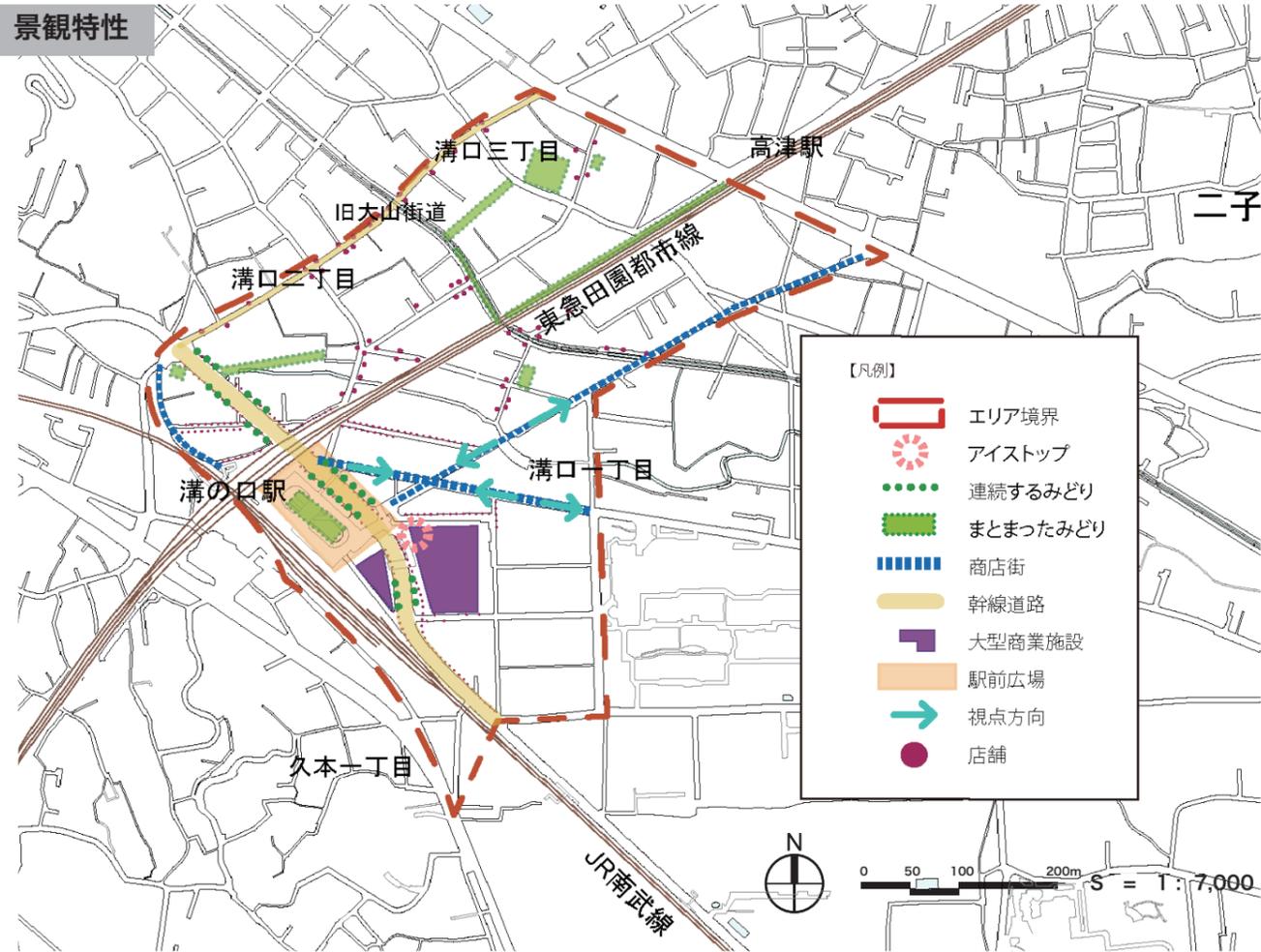
足元ライトの設置で夜道の安全確保。

商業と住居が調和し安心できる景観

5-2 溝の口駅前商業エリア

本エリアは、JR南武線と東急田園都市線・大井町線が交差する「溝の口」駅を中心とした地域で、駅前の大規模商業施設、にぎやかな飲み屋街、そして北側の緑豊かな住宅地といった、異なる性格の景観がコンパクトに集まっているのが特徴です。近年は再開発による新しい建物の整備が進みつつも、昔ながらの街並みや地元根ざした店舗や暮らしが色濃く残っており、新しさと懐かしさが同時に感じられる、都市の“今”を体現するエリアといえます。

景観特性



1. 路地に広がるにぎやかな飲食街



南口周辺には、細い路地が入り組む飲み屋街が広がっています。昭和の雰囲気を残す小さな店舗が並び、夜になると光や音、人の動きが交差し、活気が感じられます。車の通行が少なく歩行者中心の環境の中で、路地ごとに様々なにぎわいが展開しています。雑多でありながらも温かく、ローカルで親しみやすい雰囲気を生み出しています。

2. 駅前の大型商業エリア



駅と直結した大規模商業施設とペDESTリアンデッキが、広がりのある駅前空間を形成しており、その周辺は整形街区の区画となっていて、大規模な商業施設が立地していることから整然とした街並みになっています。一方で、地元の店が残る駅前商店街もあり、駅前らしいにぎわいを感じられる場所です。

3. 大山街道と住宅街に点在する店



大山街道沿いをはじめ、戸建て住宅や中低層マンションが中心の落ち着いた住宅地が広がっています。大山街道やそこから分かれた路地には古くからの商店が点在し、日常生活に必要な機能がまちの中に自然に溶け込むように配置され、落ち着いた景観を形成しています。

景観形成の目標

多様な都市機能が混在し、にぎわいのある景観の形成

駅前のにぎわいと、周辺に残る落ち着いた環境が、近い距離で切り替わるエリアである。その差こそがこの場所らしさであり、無理に全体を統一しないことが重要であると考え。にぎわいのある空間と静かな空間が段階的につながるよう、街路や建物のまとまり方を意識した景観形成を目指す。それぞれの場所がもつ雰囲気を活かしながら、全体として違和感のない連続性をつくっていく。

景観形成の方針

1. 飲み屋街のにぎわいを活かした空間づくり

景観形成の考え方

雑多でにぎやかな雰囲気の魅力を、安全で歩きやすく、誰もが楽しめる空間に整える。

具体的な方策

- 看板や照明のデザインに一定のルールを設け、1店舗あたりの看板数や大きさを抑え、建物のファサード内に収めることで、歩行者空間への過度な張り出しや情報過多を防ぐ。
- 通路の舗装や照明を改善し、夜間の安心感と快適性を高める。
- 老朽建物の再活用を促す仕組みを整備し、地域の魅力を維持。



活気と歩きやすさの両立

2. 駅前のにぎわいの見え方を整える

景観形成の考え方

駅前のにぎわいを無秩序に広げるのではなく、情報量や視覚的な強弱を調整することで、にぎわいが段階的に感じられる景観を形成する。

具体的な方策

- 建物の配置や高さを調整し、通りの圧迫感を抑える。
- 駅前から周辺にかけて看板や照明の情報量に段階性を設け、にぎわいから落ち着きへと連続的に切り替える。
- にぎわいは低層部に集約し、上層部は落ち着いた外観とする。



駅前のにぎわいを整える

3. 暮らしの環境としての穏やかな景観の維持

景観形成の考え方

住まいを中心としながら、小規模な商業や事業所が混在するエリアにおいて、静けさや緑の多い環境を保つことで、落ち着いた景観を維持する。

具体的な方策

- 街路樹や公園、植栽スペースの保全・新設を促進。
- 住宅の緑化維持への支援や、庭の活用を後押し。
- 店舗や事業所にも緑や景観への配慮を促し、まち全体の調和を図る。

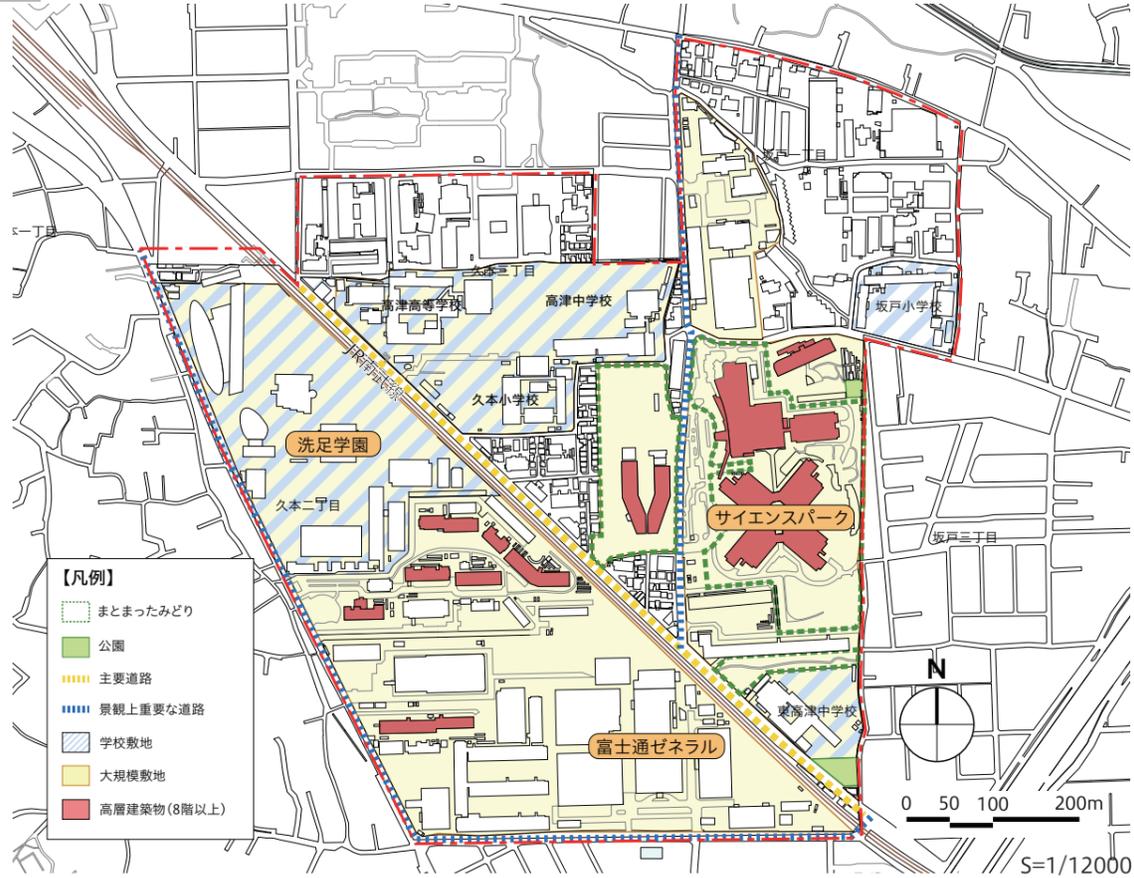


落ち着いた生活環境の形成

5-3 久本2・3丁目エリア

工業地域・第二種住居地域・第一種住居地域によって構成されているエリアです。戦時中に発展した軍需工場の閉鎖後、多くの工場跡地が残ったこのエリアでは、工場跡地の名残が残るスケールの大きな敷地で構成される景観が特徴となっています。JR南武線がエリアの中心を通り、その沿線には主要な道路が通っています。また、エリア内は坂道や高低差がほとんどなく平坦な土地になっており、公開空地が整備されている箇所では緑によって調和の取れた街並みが形成されています。

景観特性



1. 明確な敷地境界線



学校や工場など関係者以外の立ち入りを制限する敷地が集中しています。各敷地を囲う塀によって敷地の境界線が視覚的に認識可能な景観となっています。また、塀やセキュリティによって明確な境界線が引かれており、まちと敷地がはっきり区別されています。そのため、エリア内の住民における主な活動空間はまちの道路となっています。

2. まちに開かれたオープンスペース



エリア内に所在する公園は2か所のみですが、大規模な敷地の中に公開空地が設けられ、公開空地が公園と同等の役割を担うことでエリア全体に良質な環境をもたらしています。公開空地を有する大規模敷地では、まちとの境界線が曖昧であることから、まちと大規模敷地の間につながりが生まれ、周囲の街並みに開放感をもたらしています。

3. まちに密接な教育機関



教育機関が多数集積しているこのエリアでは、多くの学生が日常的にまちを行き交う活気にあふれた空間が形成されています。敷地の境界が明確に区切られていないため、まちと教育機関とのあいだには自然なつながりが生まれ、地域と教育機関が調和した空間が実現しています。

景観形成の目標

大規模敷地が周辺環境と調和したみどり豊かな景観を作る

本エリアは大規模な敷地で構成される景観が特徴となっている。本ガイドラインではこの景観の多様性を保全し、さらに引き出すため、みどりの創出を中心とした整備を行うことを目的とする。

景観形成の方針

1. まちと大規模敷地をつなぐ歩行空間を整備する

景観形成の考え方

立ち入り制限がある敷地周辺では、住民は道路が主な活動空間となるため、圧迫感の解消とまちに調和した空間の形成を行う。

具体的な方策

- 擁壁の位置は道路に十分な歩行空間を確保し、連続性に配慮する
- 敷地と道路の境界線となるフェンスや塀等は周囲と調和し圧迫感を与えないものとなるよう工夫する(壁面緑化を行う・高さを抑えるなど)
- 敷地内を積極的に緑化し、緑の連続性と歩行空間からの景観に配慮する



圧迫感の解消と調和した空間の形成

2. 大規模敷地を活かしたまちに開放的なみどりを創出する

景観形成の考え方

現存するオープンスペースを保全し、スケールの大きな敷地とまちに緑によるつながりを創出する。

具体的な方策

- 大規模敷地では有効空地などを生かして積極的な緑化を行う
- 大規模敷地と道路空間に連続性を生み出し、敷地とまちの間のつながりを創出する
- 道路沿いに空地とみどりを設けることで、歩行空間にゆとりを生み出し歩行者が過ごしやすい空間とする



有効空地を生かした積極的な緑化

3. 通学や日常生活に配慮したあかるい景観をつくる

景観形成の考え方

多くの学生が行き交う教育機関周辺を安心して利用できる空間として、安全性の高さを感じさせる景観を作る。

具体的な方策

- 幅員の狭い道路では、歩行者空間と車両空間を視覚的に分離する(路側線、ラバーコーンの設置・歩行者空間にカラー舗装を施すなど)
- 洗足学園付近を通る県道14号線では道路拡幅用の空間を歩行者空間として暫定利用するなどして、歩行者空間にゆとりをもたせる
- 学生の通学路沿いでは街灯など夜間照明を充実させることで、夜間でも明るく安心して通行できるよう配慮する

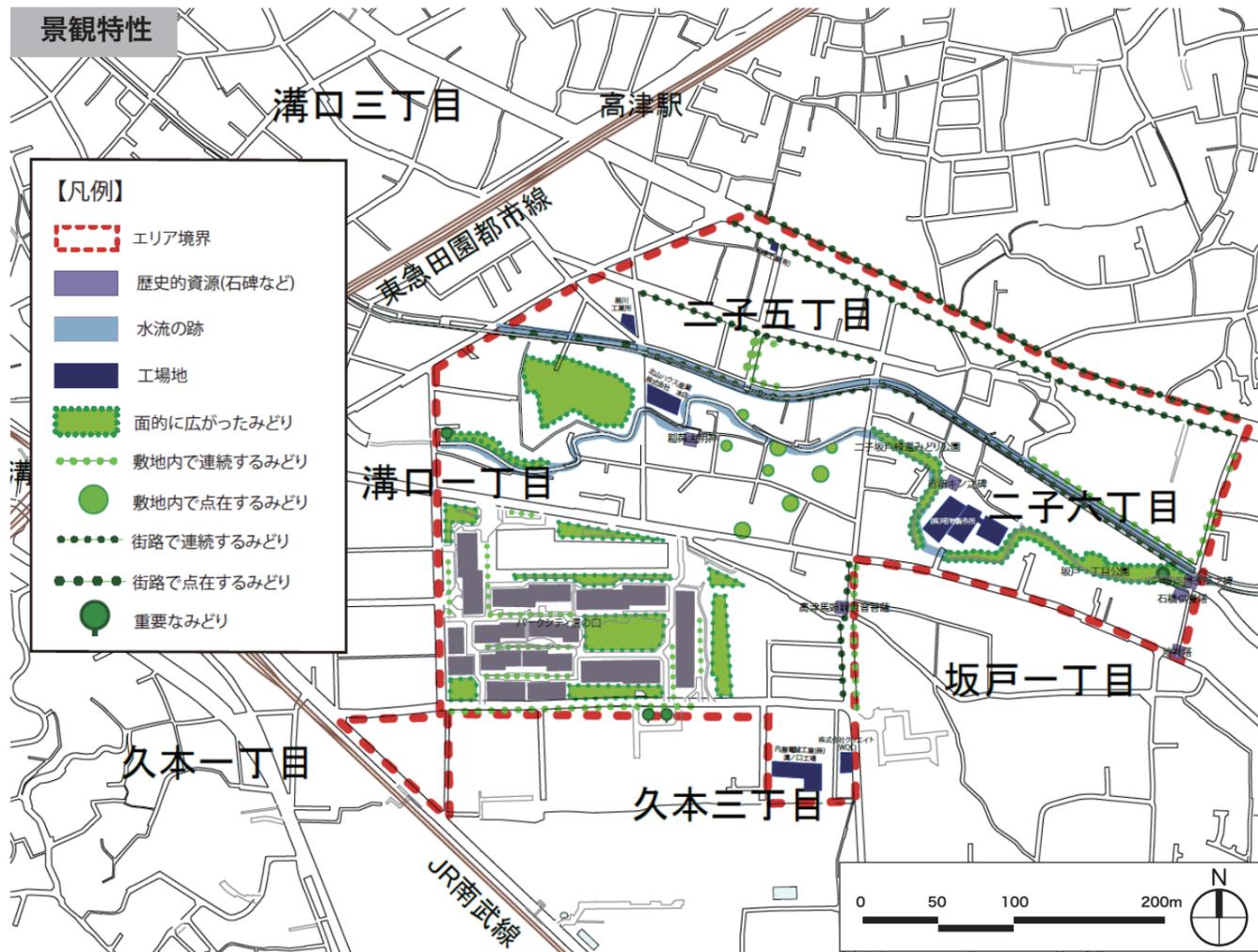


歩行者が安心して利用できる道路空間

5-4 緑道・住宅団地エリア

二ヶ領用水の一部であった流路を転用した二子坂戸緑道みどり公園や坂戸一丁目公園など、随所に見られる緑がエリアの景観を特徴づけています。緑道や公園は、かつての地形や土地利用の記憶を残しながらも、連続する緑によって自然を感じられる空間となっており、団地や街路と一体となって心地よい歩行環境を生み出しています。また、かつて工場街として発展したエリアは、高度経済成長期以降の都市再編により工場跡地が住居へと徐々に転換され、現在では穏やかな住宅街が広がっています。

景観特性



1. 工場跡地から生まれ変わった団地



かつて工場が立ち並んでいたこのエリアは、産業の転換に伴い、跡地を活用して住宅団地が整備されました。住棟の間の公開空地には広場が設けられ、住民同士の交流や子どもの遊び場として活用されています。また、建物や街路に沿って植栽が施されており、緑と調和した景観が形成されています。

2. 併走する緑道と水路



二ヶ領用水川崎堀の流路を暗渠化して整備された二子坂戸緑道は、旧水路の蛇行形状が道の線形に活かされています。現在の二ヶ領用水の流路は、水路整理を目的に整備されたもので、水路と緑道が併走する構成となっており、この並びがこのエリアの景観を特徴づけています。

3. 入り組んだ街路が残る住宅街



旧水路周辺の住宅地には、狭く複雑に入り組んだ道や住宅配置に加え、町工場やその跡地も点在し、住宅と工業系施設が混在しています。見通しのきかない通りや突き当たり、曲がり角が多く、視線の抜けが少なく、建物や道に囲まれた閉じた空間が点在し、複雑な空間の重なりを感じさせます。

景観形成の目標

連続する緑と水辺空間をつなぐ、心地よい住環境を目指したまちへ

本エリアは、連続する緑と水辺空間が広がる穏やかな住宅地である。そこで、緑と調和した景観を保ちつつ、誰もが気軽に交流できる心地よい街並みの形成を目指す。

景観形成の方針

1. 身近に自然を感じられる場として、心地よく滞在できる空間に

景観形成の考え方

日常の中で自然の変化を感じ取れる環境をつくる。既存の緑を活かし、植栽の密度や種類を見直し、四季を感じられる自然環境を目指す。

具体的な方策

- 周辺の緑道や公園と連携し、緑の連続性を高めることで、団地内外の回遊性やつながりを強化する。
- 既存の緑に加え、低木や草花を取り入れた立体的な緑化を行い、季節感のある空間とする。
- 照明計画を見直し、夜間の安全性と通行の快適性を向上させる。



色彩や照明を増やし、通行の快適性を高める

2. 水と緑の連なりが導く風景

景観形成の考え方

緑と水の連なりによって視線や人の流れを導く。緑道の蛇行形状を活用しながら、歩いても楽しい、滞在したくなる空間を形成する。

具体的な方策

- 緑道の蛇行形状を活かした滞留空間を創出する。
- 水際の植栽計画を工夫する。
- 水路へ視線が抜ける緑道を設計する。



蛇行形状を活かした滞留空間の形成

3. 視線の結節点を緑化して、緑の連続性ある街並みへ

景観形成の考え方

入り組んだ街路を活かし、突き当たりに緑を設け、緑道や水路沿いの緑と連続させることで視線を誘導する。

具体的な方策

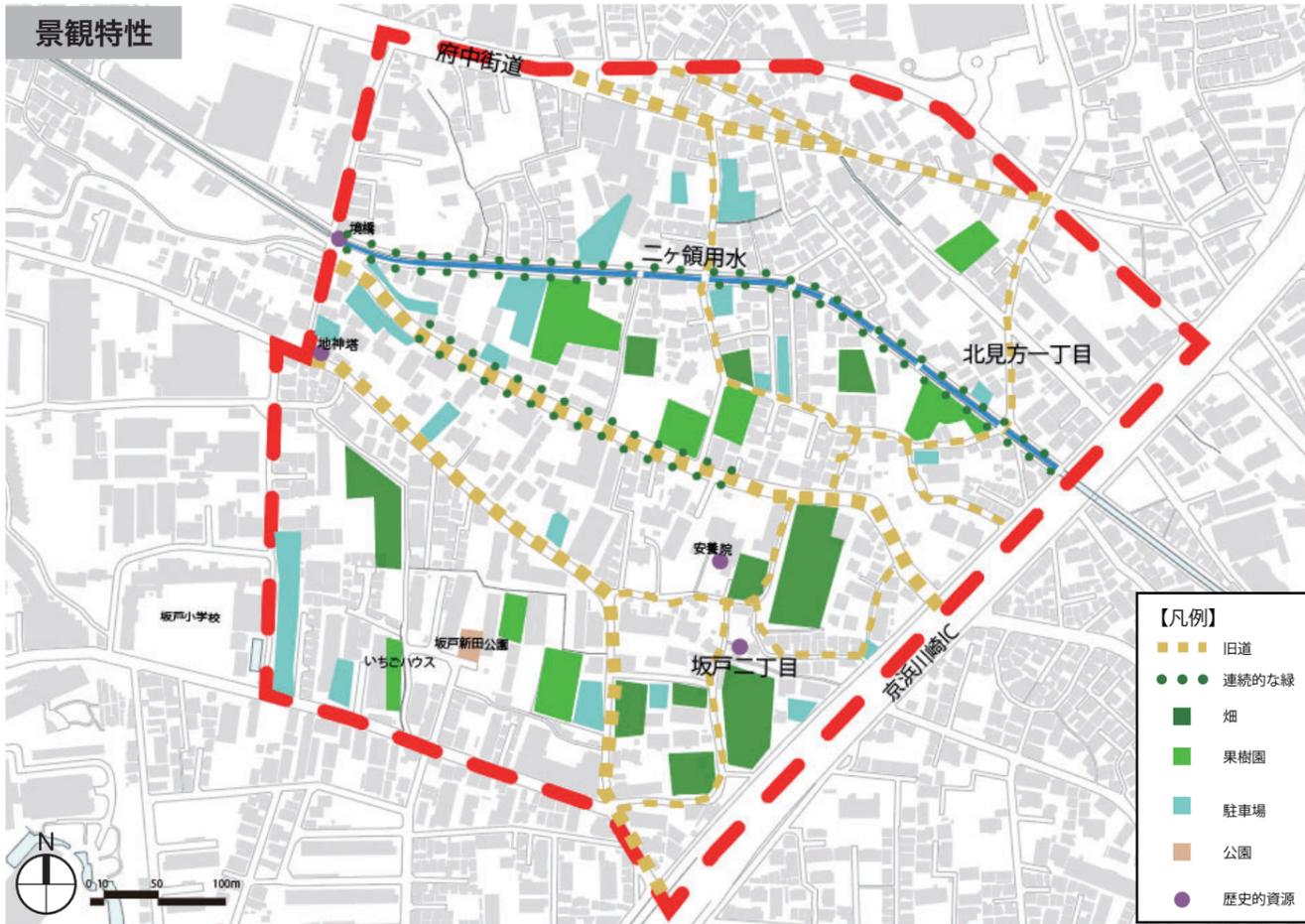
- 細く入り組んだ道の構造を残す。
- 視線が集まりやすい突き当たり等にアイストップを設ける。
- 緑道や水路沿いの緑と連続性を持たせる。



アイストップに植栽を設ける

5-5 溝の口 旧集落エリア

このエリアは、第一種中高層住居専用地域、第一種住居地域、準住居地域の3つの用途地域で構成された住宅街です。全体的に高低差は少なく、ほぼ平坦な地形となっています。地区内には、かつての農村集落の面影を残す細く入り組んだ旧道が多く、特にエリア南部では畑や果樹園が点在しており、開放的で素朴な景観を形成しています。また、二ヶ領用水の周辺やエリア中央部では、住宅が建ち並ぶ中に連続した緑が形成されており、歩行者にとっても心地よい、良好な住環境が維持されています。



1. 果樹園・畑の広がる開放的な景観



このエリアは昔から畑や果樹園が多く、現在も残っています。果樹園ではいちご、梨、みかんが育てられています。農地の一つ一つの敷地が大きく視界を遮るものがないため、平面的で見晴らしが良いという特徴があります。明治期から敷地の大きさの変わらない畑も存在しています。そのため、このエリアで畑や果樹園は歴史的な景観を表す一つの要素となっています。

2. みどりの連なる水辺空間



二ヶ領用水沿いでは、用水を流れる水と連続的な緑によって自然を身近に感じることで、景観が広がっています。水辺空間に沿って住宅が多く立ち並び、植栽は住民によって管理されています。周辺には駐車場も多く、自動車や自転車が多く通ります。また、二ヶ領用水は溝の口駅の近くまで延びており、通行量の多い通りとなっています。

3. 旧道の名残残る道路空間



道幅が狭く、曲がりくねった街路形状が特徴的な旧道が、エリア全体に多く残されています。特に坂戸御嶽神社や安養院などの神社仏閣が集まる南東部には、明治期からほとんど変わらず残る旧道が多く、昔ながらの街並みが色濃く残っています。旧道沿いには畑や住宅が並んでおり、なかでも住宅が密集しているエリアでは、畑が多い地域と対照的に、高密度な街並みが形成されています。

景観形成の目標

旧集落の空間要素を保全しつつ、歩きやすい住景観へ

本エリアは畑・果樹園・旧道などの歴史的要素が多く含まれるエリアである。住宅地であるため人通りが多い一方、歩行者空間の確保が十分でない傾向にある。そこで、歴史的要素を保全しながら、歩行者が安全で快適に通行できる住宅地の景観をつくることを目的とする。

景観形成の方針

1. 畑や果樹園以外の緑で景観を調和する

景観形成の考え方

畑や果樹園の周囲にある建物や道路空間の緑を増やすことで、畑・果樹園の緑を保全し、エリア全体の景観を調和させる。

具体的な方策

- 住宅敷地内の緑化を促し、エリア全体の農地以外の緑を増やす。
- 畑・果樹園周辺の路肩部分に連続した緑を作ることによって、景観の調和を生み出す。
- 住宅敷地内や路肩の緑においては定期的な植栽管理を行い、畑・果樹園の緑を活かした景観を創出する。



既存の緑と調和させる

2. 二ヶ領用水沿いにおける快適な歩行者空間を整備する

景観形成の考え方

二ヶ領用水と周辺の緑がつくる景観を保全しつつ、二ヶ領用水沿いの道幅を広げ、安全で快適な歩行空間を作る。

具体的な方策

- 二ヶ領用水沿いは住宅が多く、人通り・車通りともに多いが道幅が狭い。そのため、行政主導で道路の拡幅や歩車分離を実施し、安全性を高める。
- 歩道の整備にあわせて、ベンチや照明を設置し、水辺の回遊性を高める。
- 二ヶ領用水沿いの植栽は、川崎市の緑化方針と連動させ、連続性と統一感のある緑景観を維持する。



水辺の安全性、回遊性を高める

3. 旧道の魅力を活かした安全で風情ある景観を形成する

景観形成の考え方

旧道の見通し確保と道幅拡張により歩行者の安全性を高めつつ、曲線的で細い旧道ならではの特徴を活かした景観を作る。

具体的な方策

- 沿道建物の所有者による協力を前提に、ファサードや境界部分の緑化・修景を進め、旧道らしい街並みを整える。
- 緑化は路肩に連続して設置し、高さは1m以下とすることで、視界を遮らず安全性と景観を両立させる。
- 行政は曲がり角の電柱地中化や配置制限を行い、見通しを確保する。
- 民間主体による建物のセットバックや統一的なファサード修景を通じて、旧道らしさを残しながらも快適な歩行環境を実現する。

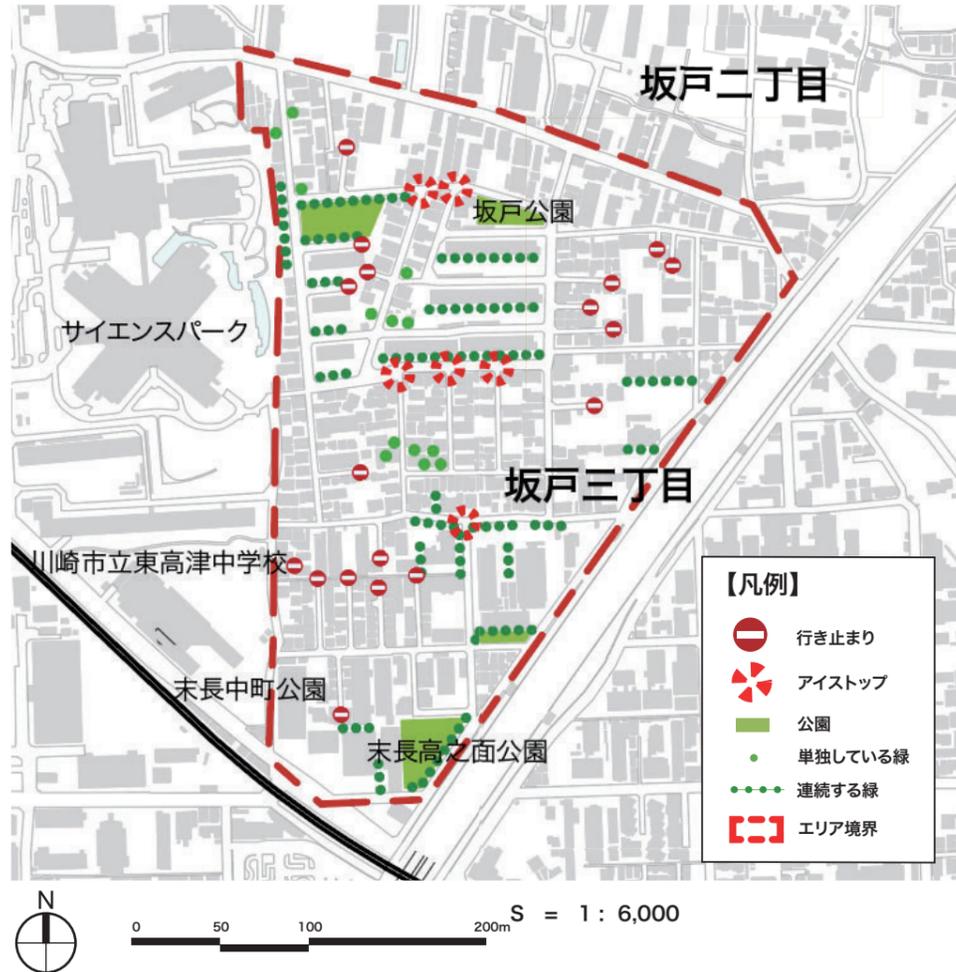


旧道の特徴を活かした歩行空間

5-6 溝の口住宅密集エリア

この地区は、新旧の建物や昔から残されている道と、区画整理によって新たに整備された道が混在しながらも、落ち着いた統一感のある街並みが形成されています。戸建て住宅や集合住宅が連続して建ち並ぶことで、整然とした印象を与えています。外観の色や形には一体感があり、随所に緑が取り入れられていることから、日常の中に自然が溶け込んだ、まとまりのある景観となっています。一方で、歩道が狭く行き止まりが多い道路構成は、外部に対してやや閉鎖的で、閑静な住宅街の景観をつくっています。

景観特性



1.敷地ぎわまで建つ住宅



敷地が細かく小さく区画されているためそれぞれの住宅は敷地を最大限に活用し、建物が道路の境界線ギリギリまで建てられています。そのため、住宅の正面が道路に沿って整然と並び連続性のある景観となっています。また、建物の高さが比較的抑えられて、高さがそろうことで空の見通しが良く、圧迫感を感じられません。

2.旧道からなる住宅地



このエリアには、いくつかの蛇行した旧道が残されています。これらの道を軸に区画整理が行われており、新しく整備された直線の道によって街が開かれています。旧道が蛇行して先が見えないことから、各区画ごとに建てられた住宅地には住民以外が入りづらくなっています。これによって、住宅同士の親密さが感じられる空間になっています。

3.緑の工夫が息づく住宅地



住宅が密集する溝の口の一角でも、緑の取り入れ方によってまちの風景や暮らしの質は大きく変わります。狭小な空間にも工夫を凝らし、植栽帯や小さな街路樹、垣根の緑を通して歩行者にやさしい環境が整えられています。こうした緑の演出が、密集した街並みにもゆとりと居心地の良さをもたらす、地域全体の魅力を高めています。

景観形成の目標

緑と暮らしが共存する、統一感のある住宅景観の形成へ

旧道を中心とした街区が区切られ、統一感のある街並みが形成されており、緑が多く点在している。

景観形成の方針

1.統一感ある景観と安心感のある住宅街をつくる

景観形成の考え方

現在、部分的にファサードが統一されているため、一定の連続性をもつ街並みが形成されている。街並みの連続性を活かして、住宅街としての街並みを保全、調和させる。

具体的な方策

- ・外壁材や色調に関して、周囲と調和するトーンを採用するよう誘導する。
- ・建物前面に植栽を取り入れることで、建物が立ち並ぶことで受ける圧迫感をやわらげつつ連続性を生み出す。



連続性をもつ街並みをつくる住宅が並ぶ

2.旧道の蛇行を活かした親密感を保全する

景観形成の考え方

蛇行した旧道によって造られた各区画を大事にしながら、一体感を持たせ、住宅同士の関係を密にする。

具体的な方策

- ・各区画に住む住民が顔見知りになるようソフト面から親密な繋がりを目指す。
- ・住民以外の不審な人物が出入りしづらくなるよう住宅同士の統一感を出し、親密さをアピールする。
- ・各敷地内で建物以外の部分で統一できそうなもの・ことは統一し、個性的な部分も大切にする。



旧道があることによって住宅の親密度が高い

3.密集した住宅地の緑化を推進する

景観形成の考え方

緑を使うことで、視覚的な癒し、気温の調整、プライバシー確保など、住民の暮らしに多く利点をもたらされる。

具体的な方策

- ・庭の設置・再整備：住民に対して庭や鉢植えなど、小規模でも緑を育てる意識を促す。
- ・グリーンカーテン(ゴーヤ、朝顔など)を活用して、日射を遮り、省エネ・美観を両立。
- ・垣根や塀の代わりに生垣を推奨(自治体による補助制度の活用も視野に)。



住宅地の中に点々と存在する緑